

「おさしづ」第3巻における「刻限」と「道」

おやさと研究所講師
澤井 治郎 Jiro Sawai

今回は、『おさしづ改修版』第3巻(明治26～28年)の、刻限の「おさしづ」における「道」の用例を整理する。刻限の「おさしづ」は27件あり、「道」という言葉は22件に出ている。そのうちの13件では3回以上「道」が用いられている。第3巻には刻限の「おさしづ」は年平均にして9件ある。第1巻では年平均24件、第2巻では年平均13件であるから、年を経るごとに刻限の件数が減ってきている。

第1巻、第2巻の刻限における「道」の用例においては、「神の道」「神一条の道」と「世界の道」「世上の道」という二通りの「道」を対比して、「世界」あるいは「世上」に流されることを戒め、「神の道」を通ることが強調されている。しかし、第3巻の刻限には「世界の道」や「世上の道」という言葉は出てこない。そのかわりに、「この道」がどのように成り立ってきたかを説くことによって、今の歩みを見直すように諭される場面が多い。以下、その用例を確認する。

人間の道は要らん

先に述べたように、「おさしづ」の第1巻や第2巻のように、教会制度の発展を背景として「世界の道」と「神の道」を対比するような用例は、第3巻にはみられない。しかし、第3巻の「道」の用例をみると、「神の道」を通る人々に対して、しばしば「道」を改めるように促がされている。それは「人間の心人間の道」というものである。

「話にも伝えてある。ふでさきにも伝えてある。……それを聞かず、神の道の一つも立てず、あっちの顔を眺め、こっちの顔を眺め、人間の義理を立てる。神の道とは言えようまい。……あちらこちらの顔を眺め、これでは一つの道とは言えようまい。……人間の心人間の道は要らん。」(さ27・4・3)

この「おさしづ」では、「あっちの顔を眺め、こっちの顔を眺め、人間の義理を立てる。神の道とは言えようまい。」と言われ、さらに端的に、「人間の心人間の道は要らん」と諭されている。

次にあげる「おさしづ」は、「あちらこちらの顔を眺め」ることとは異なるが、やはり人間の道ということになると思われる。

「難しい中にあらあらの道がある。どういもの今の一時事情、始めた一人(にん)、大変苦勞した。我が身我が身の心を出して、事情始めた残念さ。だんへ道を早く取り替え、だんへ論し通り、伺い通り、どんな事でもこんな事でも危なきは無いと知らしたる。なれど伺いさしづ、論の理を消して、めんへ心の理を拵えて、暗がりの道。」(さ26・5・11)

先ほどの「おさしづ」はまわりの顔(人間の義理)ばかりを立てることを指していたが、ここでは「我が身我が身の心」、すなわち、我が身勝手の心を出すことを戒められる。それは「暗がりの道」へとつながっているとして、「道を早く取り替え」るように言われている。そのためには、「論し通り、伺い通り」の歩みを進めるように諭されている。

第3巻には刻限の「おさしづ」が少ないことは先に述べたが、実際には「もう話しようかと思ひへ、ようへ越して来た」と語られている。

と語られている。

「ようへ往還あれど、崖道通らんならんような道があつてはどうもならん。もう話しようかと思ひへ、ようへ越して来た。意見しようと思つても、意見聞かんと言う。これが一つの初め。澄んだ道から澄んだ心が鏡やしき。澄み切つたもの、曇りあつては世界映ろうまい。」(さ28・3・18)

「もう話しようか」と思いつつも、長らく時間が経ってしまったのは、話をしようと思つても「意見聞かん」からであると言われる。しかし、どこまでも、心澄み切つて通ることを求められている。

この道は

このように「人間の道」を「神の道」に取り替えるよう促される。そのために、他方では「この道」のこれまでの歩みを改めて説き聞かせて、それに照らして自らの歩みを再考するように促されている。

「この道艱難苦勞の道も通りたやろう。通りたならこそ、この道が出て来たのや。……通つた中に道ある。……山坂をも道を付けたら楽々の道も運ばれるやろう。をやが道を付け、だんへ付け掛け、一人(にん)やしるに貫い受けて、始め掛けた道の割方してみた処が、人数足らいであちらも掛かり、こちら一寸掛かった。……百十五才まで寿命定めた。なれど、どうもならんへから、年限を縮めて治まった。たゞあの人結構やと言うだけでは分からん。道の理分からねばならん。」(さ26・12・16)

このように、ここでは親神が教祖を「月日のやしる」として貫い受け、この教えを始められたところから、115歳の定命を25年縮めて現身をかくされたことなど、現在まで続いてきたこの道の信仰の由来を説き、「道の理」、すなわち、何のためにそのような道を付けてきたのか、そして、艱難苦勞の道を通つたからこそ、「この道」が出来てきて、今の道があることを悟るように言われる。次の「おさしづ」にも同様の言葉がある。

「この道の初めという、何も知りたる者も無き道より今日の道と言う。嘘とは思われようまい。だんへ長らえての道を通り、艱難苦勞の道を通りた理によりて委せ置くと言うたる。……明日日からこうという心を定めて、すつきりへ改めるなら、売り払うた体にしてま一度は許し置こう。」(さ27・12・1)

この「おさしづ」における「艱難苦勞の道を通りた理によりて委せ置くと言うたる」というのは、飯降伊蔵本席のことを指しての言葉だと思われる。「おさしづ」の言葉は、長年、「艱難苦勞の道を通りた理」によって委せられているものであるから、その言葉を大事にするように、勝手な人間思案の心を出さないよう、すつきり心を改めるように言われている。

そして、

「この道は俺がへと言うたて皆んな神の道、神が働けばこそ日々の道である。」(さ28・10・7)

という心で日々つとめて通るようにと諭されている。